

ロシア語の中の女性

——男女ペア語にみる性差——

笹 尾 道 子

は じ め に

言葉には社会が映し出される。最近、若い女性の使う日本語から女性言葉が消えつつあるが、これも日本社会の中の女性の地位の変化を反映していると言えるだろう。言葉を調べれば、社会のありようがわかるとも言える。

しかし言葉は社会の変化をストレートに反映するとは限らず、少し遅れるのが普通である。そこで言葉を見直し、現実 に即したものに、差別的でないものに積極的に変えて行くという動きが、特にアメリカで盛んである。“Miss” “Mrs.” の区別をせずに “Ms.” を用いたり、“chairman” を “chairperson” に言い替えるなどの動きがそれである。

日本でも、行政用語から、「一定年齢以上の既婚女性」のイメージの強い「婦人」をはずし、「女性」に変える地方自治体が出てきている。福岡市の「女性部女性企画課」などがその例である。「盛岡市婦人懇話会」も、「女性」のほうが年齢や既婚・未婚の区別がなく、すべての女性を対象とする行政にふさわしいとして、改名を求めていると伝えられる¹⁾。

女性だけを既婚か未婚かで区別するのはロシア語もおなじである。“девушка” は「若い未婚の女性」を意味するが、しばしばペアで用いられる “юноша” には「未婚の」という条件は特に含まれない。他の男女ペア語にも、意味や使われ方、歴史的変遷、あるいは辞書の中での記述の仕方にさまざまな不均衡があるに違いない。それらを調べることにより、ロシア語に映されたロシア社会の女性観を探ろうというのが、小論の目的である。

資料とした辞典のうち主なものを以下に記しておく。[] 内は本文中で使用する略称。

Словарь современного русского литературного языка, в 17 томах, АН СССР, 1950-1965. [СРЯ17]

Словарь современного русского литературного языка, в 20 томах, АН СССР, 1991, том 1. [СРЯ20]

Словарь русского языка, в 4 томах, АН СССР, 1981-1984. [СРЯ4]

1) 1992年3月1日付朝日新聞による。

Толковый словарь русского языка, под ред. Д. Н. Ушакова, 1935 – 1940.
[Ушаков]

С. И. Ожегов, Словарь русского языка, 1963, 1975, 1987, 1989. [Ожегов 63, 75,...]

Словарь русского языка, XI–XVII вв. АН СССР, 1975–1991. [СРЯ XI–XVII]

Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля, под ред. Бодуэна-де-Крутенэ, 1912. [Даль]

М. Фасмер, Этимологический словарь русского языка, 1964–1973. [Фасмер]

Учебный словарь сочетаемости слов русского языка, М. 1978. [УССС]

Частотный словарь русского языка, под ред. Л. Н. Засориной. М., Русский язык, 1977. [ЧС]

東郷正延他編「研究社露和辞典」1988 [研究社]

1 女性の一生と言葉

まず女性の一生をおおまかな年代で区切る言葉から見ていく。文体的に中立なものに“девочка”“девушка”“женщина”“старуха”がある。これに対応する男性側の語としては“мальчик”“юноша”“мужчина”“старик”がある。“ребёнок”“подросток”などのように男女のペアを成さない語は、ここでは扱わない。

девочка – мальчик

基本的な意味は“Ребенок или подросток женского пола”「女の子、少女」と“Ребенок или подросток мужского пола”「男の子、少年」である。“подросток”は“мальчик или девочка в переходном от детства к юности возрасте”「幼年時代から青春時代への移行期にある少年少女」で12歳から16—17歳をさすから [СРЯ17], “девочка”と“мальчик”は生まれてから16—17歳位までの男女をさすことになる。さらに「未熟な若い女性・男性」の意味もある。

この他に“девочка”には俗語として, “Женщина легкого поведения, проститутка”「身持ちの悪い女, 売春婦」の意味もある [Ушаков, 研究社]。

“девочка”の卑称形である“девчонка”も「軽薄な娘, 尻軽娘」の意味を持つ [СРЯ4, 研究社]。

つぎにこの2つの語を取り巻く言葉を [YCCC] でみてみよう。違いが大きいのはこれらの語につく形容詞である。共通のものを除くと、“девочка”にだけつく形容詞が26, “мальчик”にだけつく形容詞が53残る。前者の内訳は, “резвая”「快活な」“робкая”「臆病な」など性格に関するものが11で, 残り15は外見や出身, 年齢に関するものとなっている (полная「太った」, городская「都会の」, семилетняя「7才の」など)。一方“мальчик”の方は“сильный”「強い」“чужой”「身内でない」“пятилетний”「5才の」など, 外見, 出身, 年齢に関するものは10語くらいで, 残り40余語はすべて性格に関するものである (славный「とてもいい」, неприятный「不愉快な」など)。男の子の方が性格を生き生きと表現されていることがわかる。このことは, ソビエトのテレビアニメを調べた時に得た結論と同じである²⁾。

他動詞との結合をみると, 両方とも“родить”「産む」“назвать”「名付ける」の対象になっているが, 違うのは“девочка”は“воспитывать”「育てる」“любить”「愛する」“обидеть”「侮辱する」の対象, “мальчик”の方は“хвалить”「ほめる」“ругать”「叱る」の対象となっていることである。女の子と男の子の育て方の違いが表れているように思われる。

なお [YCCC] は語結合の厳密な規範性をめざし, さまざまな辞典と, 現代語の使用実例カードを利用し, またインフォーマントによる検証も受けていると序文にあるから, 語結合のすべてを網羅しているとは言えなくとも, 頻度の高いものについてはかなり収録されていると見なしてかまわないであろう。さらにいえば, たとえある程度編者のし意がはたらいっているとしても, それはそれで編者の女性観を表すものと考えることができよう。

девушка - юноша

“юноша”の主要な意味は“Лицо мужского пола в возрасте, переходном от отрочества к возмужанию (зрелости).”「少年時代からおとなになるまでの移行期の男性」で, どの辞典もほぼ一致している。“отрочество”とは, “Возраст между детством и юностью.”「幼年時代と青春時代の中間の年齢」[СРЯ17], “возмужание (зрелость)”は肉体的・精神的成熟を意味するから, “юноша”は15才くらいから一人前の大人になるまでの男性をさす言葉ということになる。[Даль] には, 「15才から20才過ぎまでの成熟期の男」とある。転じて「若々しい中年男性」と「ナイーブでうぶな成人男性」の意味もある。

同義で口語体の“парень”も“девушка”とペアで使用されることがあり, “юноша”よりも頻度が高い語である [ЧС]。“парень”の旧義は「未婚の若い農民」であった [СРЯ

2) 笹尾「ソビエトテレビアニメの主人公」アルテス・リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要) 第48号1991年6月

17]。[СРЯXI-XVII] には、「若者」と「男の子」の意味が記されている。現在は俗語として「(親しみをこめた) やつ, 男」の意味でも使い、未婚は条件でなく、対象となる年齢は“юноша”より広い。

同じく“юноша”の同義としてあげられる“молодой человек”は、プーшкиン辞典³⁾には、「18才から30才までの若い男」としてある。今でもやはり“юноша”よりやや上の年齢まで含まれるようだ。この言葉も未婚・既婚は問題にしない。

“девушка”の基本的な意味は、“Лицо женского пола, достигшее (полного) физического развития, но не состоящее в браке.”「肉体的に(充分)成長したが、結婚していない女性」[СРЯ17, СРЯ4],あるいはもっとはっきり“Лицо женского пола, достигшее половой зрелости, но еще не вступившее в брак.”「性的に成熟したがまだ結婚していない女性」[Ушаков, Ожегов]と説明されている。つまり年齢は二の次で、性的に成熟した未婚女性なら何才でも“девушка”ということになる。実際、いつまでも結婚しない女性は、“остаться девушкой (в девушках)”「乙女のままでいる」、あるいは“старая дева”「年のいった乙女」とやゆされる。中年の男性が“юноша”と言われれば、「若々しい」とほめられたことになるのと大違いである。

“юноша”が、肉体的にも、精神的にも大人になりきらない年齢の若者をさすのに対し、“девушка”は精神的な面は問題にされず、性的に成熟していることと、未婚であることが条件となっている。だから“юноша”については、おおざっぱにでも年齢の範囲を示している辞典があるのに、“девушка”にはそれが見あたらない。これは“юноша”が“юный”「若い」からの派生語であるのに対し、“девушка”が“дева”「処女」からの派生語であることから当然言えることではある。

最新改訂版の[Ожегов89]だけは、“девушка”の上記の意味を第二義に下ろし、第一の意味として、“Лицо женского пола в возрасте, переходном от отрочества к юности.”「少女時代から青春期へ移行する年代の女性」と定義している。“девушка”の意味する年代を明確にしようとしたことは評価できるが、この定義だと青春期の女性が入らないことになり、おかしい。まさに思春期から上の、主として青春まっただなかの女性を意味する言葉であるはずだから。それと、この上記の年代であれば、未婚でなくてもよくなったのだろうか。

若くない女性に対して、特に店員やウェイトレスに対し、呼びかけの言葉として“девушка”が使われることがある。習慣であるとはいうものの、そう呼ばれた女性は侮辱を感じる事が少なくないらしい⁴⁾。

3) Словарь языка Пушкина/Под ред.В. В. Виноградова и др. АН СССР, М. 1956-1961.

4) Формановская Н. И. Вы сказали “Здравствуйте!” М. 1989.

“девушка”は歴史的にみれば、上述のように今は古語となっている“дева「乙女・処女」”の指小・愛称形であり、18世紀初めまでは“девочка”と同義で使用されていたが、その後中立化し、意味する年齢も上がり、“девочка”より上の年代の「未婚の若い女性」を指すようになっていく。同じく“дева”から派生した“девка”も、はじめは指小名詞として「女の子」を意味したが、次第に意味する年齢が上がり、いまの“девушка”と同義で使われるようになった。しかし17世紀頃から、俗語化し始めたために、かわりに“девушка”の格上げが起こったらしい⁵⁾。“девка”には俗語として「売春婦」の意味もある。

つぎに“девушка”と“юноша”を取り巻く語について、[УССС]には“девушка”しか載っていないので、他の辞典の用例から拾ってみる。

девушка хорошенькая, в расцвете лет; девушка юная, молодая, взрослая; красная девушка; девушка-летчик, девушка-комбайнер; подтянутая и строгая девушка-милиционер; красота и невинность девушки [СРЯ17]

хорошенькая, скромная, цветущая, симпатичная, современная, легкомысленная девушка [研究社]

юноша, полный пламенной жизни; безусый, неопытный юноша; архивные юноши; остаться юношей; юноша лет в пятьдесят [СРЯ17]

безусый, неопытный, восемнадцатилетний, пятнадцатилетний юноша [研究社]

“девушка”の方には、娘盛りや美しさ、つつましさを表す言葉のほか、「現代娘」や「軽薄な娘」もある。あとは職業名とともに使用する例である。“юноша”の方は、未熟さ、若々しさを表す言葉が目だつ。

なお [УССС] によれば、“девушка”につく形容詞 72 語の過半数は外見や年齢、出身に関係するものであり、また性格に関する形容詞は“веселая”「陽気な」「добрая」「親切な」などの肯定的な意味合いのものがほとんどで、否定的な意味のものは、“плохая”「悪い」「легкомысленная」「軽薄な」くらいである。

женщина – мужчина

“женщина”の第一義は、[Ожегов] を除きどれも、“Лицо, противоположное по полу мужчине.”「男と反対の性の人」となっており、“мужчина”をみると“Лицо, противоположное по полу женщине”「女と反対の性の人」で説明になっていない。

5) Борисова Е. Н. Девушка, девица, девочка, Русская речь 1989 №1 による。

[Ожегов] だけは1972年の改訂版から、上記の記述の後に、“та, которая рождает детей и кормит их грудью.”「子を産み、母乳をやる人」と説明を加えるようになった。「子を産まず、あるいは人口乳で育てる人」はどうなのかと疑問がわく。

[СРЯ4] と [Ушаков] には“Лицо женского пола как воплощение определенных свойств, качеств.”「女性の特性を具体的に表している人」の意味も載っている。「女性の特性」とは何かの説明がないが、用例中からそれらしいのを拾ってみると、“чуткость женщины”「敏感さ」, “самые красивые движения”「美しい動作」, “кокетство”「媚態」ということらしい。ついでに“женственный”「女らしい」はどう説明されているかを調べると、“мягкий, нежный, изящный”「やわらかい、やさしい、優雅な」となっている。“мужчина”の方には、“взрослый, мужественный, сильный”「勇気、不屈さ(мужество, твердость) をそなえた男」という記述が見えるから [СРЯ4, СРЯ17], これが「男らしさ」に当たるのであろう。

“женщина”の次の意味は“Лицо женского пола, вступившие в брачные отношения.”「結婚した女性」[Ожегов] または“Лицо женского пола, состоящее или состоявшее в браке.”「結婚しているか結婚したことのある女性」[СРЯ4] としてあるものと、この意味の前に“Взрослая, вышедшая из состояния подростка.”「少女時代を終えたおとなの女性」[СРЯ17] または“Взрослая, в противоп. девочке.”「“девочка”に対するおとなの女性」[Ушаков] を入れてあるものがある。[Ожегов] には従来、“Взрослая, в отличие от девочки, девушки.”「“девочка” “девушка” と異なる大人の女性」という記述があったが、1989年版からこれがすっかり消えた。「既婚女性」という定義で十分と考えたためであろう。

Ушаков にはさらに、“Лицо женского пола, начавшее половую жизнь, в противоп. девушке.”「“девушка” に対して、性生活を始めた女性」の意味も加えられている。“Она рано стала женщиной.”「彼女は早く女になった」[Ушаков] の例からもわかるように、“женщина”の第二義は単なる成人女性、あるいは既婚女性ではなく、「性体験のある女性」という意味を暗に含むと考えられる。この語の語源である“жена”は、「女」と「妻」の二つの意味を持っていたが、“женщина”は「妻」の意味を「処女でない女性」の意味で受け継いでいることになる。未婚であれば処女であるとは限らないが、一応未婚で若ければ“девушка”, 既婚であれば“женщина”と呼ぶことが定着している。もっとも“девка”や“девочка”が「売春婦」の意味で使われることから、語源の「処女」はもう意識されなくなっているのだろう。

“женщина”には、「身持ちの悪い女、妾」の意味もあるらしい [Ушаков]。“уличная женщина”なら「売春婦」である。

一方“мужчина”の第二義は、“Такое взрослое лицо, в отличие от мальчика,

юноши.”「男の子・若者に対しおとなの男」でどの辞典もほぼ一致している。[Ушаков] だけは, “Лицо мужского пола, достигшее зрелого возраста, физической и духовной зрелости.”「肉体的および精神的に成熟した男性」と,「おとな」の中身を説明している。精神的には子どもでも“девушка”は結婚さえすれば“женщина”になれるのに対し, 精神的にもおとなにならなければ, “юноша”は“настоящий мужчина”「本当の男」[Ушаков, УССС] にはなれないのだ。だから, “Будь(те) мужчиной!”「男らしくしろ」[Ожегов, СРЯ, УССС] と励ませても, “Будь женщиной!”「女らしくしろ」は励ましの言葉にはならない。“Поговорим как мужчина с мужчиной.”「男対男の話をしよう」[Ожегов] の表現にも,「女」ではない「男」だと“мужчина”の自負がうかがえる。

この語の語源である“муж”は,「男」「人間」「夫」の意味を持っていたが,“женщина”と異なり,“мужчина”は「夫」の意味は受け継いでいない。未婚であっても“юноша”は“настоящий мужчина”になれるのだ。

[УССС] でこの2つの語につく形容詞を見てみる。男女共通のものを除くと,“женщина”の方に48,“мужчина”の方に17残る。そして後者の形容詞が,“крупный”“широкоплечий”など体格や風采などを表すものが多いのに比べ,前者は外見を表すものが12で,残りは性格を表す形容詞である。“девочка”の時は,“мальчик”ほどに性格に関心がもたれなかった。“девушка”の時も内面より外見の評価の方が,比重が大きかった。“женщина”になると,外見だけでなく,その内面にも注意が払われるようになるのがわかる。しかし“женщина”にだけつく形容詞の内容をみると,“злая”「いじの悪い」“завистливая”「うらやましがりの」“крикливая”「口やかましい」“легкомысленная”「軽薄な」など悪い意味合いのものが半数以上を占める。良い意味合いのものでも,“скромная”「つつましい」“тихая”「おとなしい」“чуткая”「おもいやりのある」“мягкая”「柔らかな」“заботливая”「よく気のつく」“трудолюбивая”「はたらきものの」“внимательная”「親切的な」など,いわゆる女のスtereotypeに関係するものがめだつ。

“женский”「女性の」と“мужской”「男性の」の後にはどんな名詞がくることが多いのかをみると,“женский”だけにつくものには,“плечи”“грудь”“красота”“улыбка”“платье”“чулки”“сапоги”“украшения”といった体の一部や容貌,身につける物の名の他に,性格を表す言葉が多く,やはり,“чуткость”“мягкость”“хитрость”“интуиция”“чутье”“любопытство”“прихоть”“каприз”“кокетство”“ласка”“забота”“доля”“счастье”などの言葉がならんでいる。“мужской”にだけ上げられている名詞は少数で,性格に関するものは,“твердость”“прямолинейность”の2つだけである。あとは“сорочка”“рубашка”など身につける物の名がほとんどである。

“женщина”にくらべ“мужчина”につく形容詞,特に性格を表す形容詞の数が少ない

のは, “мужчина” のかわりに “человек” が用いられることが多いからだと考えられる。

ここで “человек” についても触れておきたい。“человек” はもともと「一族の息子」の意味で, それが「人間一般」の意味に変わったわけだが, 今でもしばしば「男性」だけを指す言葉としても用いられる⁶⁾。上記の辞書のうち, 研究社以外にこの点の指摘がないのはなぜであろう。旧義としてあげてある「下男」とは違う。“молодой человек” 「青年」はあきらかに女ではないし, [Ожегов63] の “юноша” の説明の, “человек в возрасте, переходном от отрочества к зрелости.” の “человек” も明らかに「男性」の意味である。“В автобусе один человек спрашивает женщину, которая сидит рядом с ним:...” の “человек” も “женщина” との対比で出て来るから, 男性である。一般に “Один человек...” で始まる笑い話はみな「ある男が…」の意味である⁷⁾。

また [СРЯ17] が「人, 一人前の人間」の意味で引用している例の中に, 話題にされているのが男性であることが明らかな例が19あるのに対し, 女性は2例しか見つからないのも, 女性に対して, “человек” が使われにくいことを示している。

面白いことに, [Ожегов] は “юноша” の説明を, その後の改訂で次のように変えてきている。“Человек (мужского пола) в возрасте,...” (72年改訂) “мужчина в возрасте,...” (89年改訂)。“человек” のかわりに, “мужчина” を使用したことは, 歓迎すべき事である。「男性」の意味で “человек” を使用することは, 「人」から女性を排除することになるからだ。

старуха – старик

この2つの語は, いずれも “старый” 「年とった」を語源とし, 基本的には「老齢に達した男女」を意味する。口語体で「年老いた母・父または妻・夫」の意味でも使う。

“старик” は「経験豊かな人」の意味でも用いる。(ただしことわざ “И на старуху бывает проруха.” 「弘法も筆の誤り」の “старуха” もこれに近い。) また “старик” を複数にして, 「古い世代」または「年とった両親」を表す。“старик” は口語体で, 「古くからの友人」の意味もある。

この2つを取り巻く言葉について, [УССС] には形容詞, 名詞ともまったく同じものが載っている。

6) Украинско-русский словарь/Под ред. В. С. Ильина, Киев, 1965. によれば, ウクライナ語では今でも第一義は「男」である。

7) 例は, Jokes Anecdotes Short Stories, M. Progress Publishers から引用。

2 家族の中の女性と言葉

ここでは、家族・姻戚関係の中で女性がどう呼ばれるかをみていく。“дочь” “жена” “мать” “бабушка” “сестра” “невестка” “мачеха” “невеста” “вдова” を取り上げる。

дочь – сын

どちらにも「親に対する子」の意味のほか、雅語として「～の子」の意味もある。例：“сын своего времени” 「時代の子」 “лучшие дочери народа” 「民衆のより良き娘達」。相違点は，“сын” を複数にすると「子孫」の意味をもつことである。

このペアにかかる形容詞で共通のものを除くと，“дочь” に “красивая” 「きれいな」が，“сын” に “талантливый” 「才能のある」が残る。名詞では，“отметки, книги, жена сына; тревога за сына” が残る。娘は器量が、息子は頭の出来具合と嫁が、気にかかるということか。“дочь” の方にだけ “Дочь Евы” 「好奇心の強すぎる女」という言葉があるのは、女は男よりもつまらないことに好奇心を持つと思われてきたからだろう。しかし女性の知識欲さえも、しばしば「単なる好奇心」と疎んじられてきたのではないか。

ために “любопытный” 「知識欲おおせいな」と、“любопытный” 「好奇心の強い」の後にどんな言葉がくるのか見てみる。案の定，“любопытный” の後には，“человек, тип, женщина, парень, ребенок, мальчик, девочка, старушка, сосед,...” となれば、3種類の女性が出てくるのに、“любопытный” の後には，“человек, ребенок, дети, ученик, студент, путешественник,...” と女性だけを意味する言葉はまったく出てこない。

жена – муж

基本的な意味は「妻」と「夫」であるが、前者には旧義として「女」が、後者には旧義として「成人男子」、雅語として「社会、科学の分野の名士」の意味がある。

[УССС] には，“дорогая” 「愛すべき」 “злая” 「いじの悪い」 “надоевшая” 「うんざりした」 “сварливая” 「口やかましい」 “постылая” 「あきあきした」 “неверная” 「不貞な」 “новая” 「新しい」 “чужая” 「他人の」が “жена” の方にだけ，“постаревший” 「年とった」 “состарившийся” 「老けた」 “скучный” 「退屈な」が “муж” の方にだけ載っている。性格の悪さを意味する形容詞の数は，“женщина” 同様、ここでも女性側に多いようだ。動詞では，“обидеть, оскорбить, ругать, обожать жену” “ненавидеть, презирать, упрекать,

пилить, накормить, познакомить мужа”がそれぞれ独自のものとして載っている。夫は妻を「侮辱し、罵る」が「熱愛」してもいるのに対し、妻は夫を「憎み、軽蔑し、がみがみ叱る」が「食事をさせてやる」ということのような。しかし名詞には“совет жены”「妻の助言」などもあり、しっかり者の妻の姿もうかがえる。

мать – отец

どちらも「(人間・動物の) 親」「中年男女への呼びかけ」「子どものいる家庭内での夫婦同士の呼びかけ」「修道女⁸⁾・修道士」の意味を持つ点は同じであるが、“отец”が「創始者」、複数で「祖先」の意味を持つ点異なる。旧義には「長老たち」もある。“отец небесный”と言えは「神」のことである。一方“мать”は“мать-земля”「母なる大地」「Родина-мать」「母なる祖国」など親愛をこめた表現に使われる。“честной отец”なら「神父さま」だが、“мать честная!”なら「おやまあ」と驚きの言葉になってしまう。“Я тебе покажу кузькину мать.”「おぼえてろ」のように、“мать”は脅しの言葉としても用いる。“мать”を使ったもっと汚い性的意味合いをもつ罵言もある。

[УССС]で、共通でない形容詞を調べると、“мать”に“ласковая, нежная, самоотверженная, многодетная, настоящая”が、“отец”に“прекрасный”が残る。「優しく、柔和で、献身的で、子だくさんの母が、ほんとうの母」ということになろう。父は「すばらしい」のひとつ。動詞では、“мать”は“поцеловать, навещать, заступаться, заботиться, вспоминать, думать, тосковать”の対象、一方“отец”は“уважать, подражать, обещать, бояться, волноваться, скучать”の対象となっている。母親のことは、「キスし、訪ね、護り、気かけ、懐かしく思う」が、父親のことは、「尊敬し、手本にし、約束し、心配し、懐かしむ」のだろう。

一家の長として敬われ、威厳を持った父親像と、優しく献身的で、親しい存在である母親像が浮かび上がる。だから“мать”は汚い罵言に使えるが、“отец”は恐れ多くて使えないのであろう。

бабушка – дед

「祖母」「祖父」のほか、口語体で「年とった女・男」の意味でも使われる。違うのは、“дед”の複数は「昔の人々・祖先」の意味になること、“бабушка”には旧義として「産婆」「女祈禱師」の意味もあることである。

8) 「修道士の妻」の意味もある。

“бабушка”のもとの語である“баба”は、ずっと以前は「祖母・老人・（既婚）女性・産婆」などの意味で使われていたが、やがて俗語化し、「女房」や、女を蔑む言葉として使用されるようになったため、かわってその愛称形であった“бабушка”が中立化したのであろう。“дед”の方にはそのようなことは起こらず、“дедушка”は今も愛称形である。

“бабушка”だけにつく形容詞は，“старенькая” “добрая” “дорогая” “милая”，“дедушка”の方だけにつくのは“дряхлый” “бодрый”となっている。同じ「年とった」という意味でも、おじいさんの方には“старый”のほかに“дряхлый”「老いさらばえた」が、おばあさんの方には，“старый”のほかにその愛称形“старенькая”が使われる。“бодрый”を除き，“дед”につく形容詞は全体として悪い意味合いのものばかりである。おばあさんはおじいさんより、親しみをもたれているようだ。

сестра – брат

“сестра”に「看護婦」の意味がある他は、この2語の意味に大きな違いはない。どちらも「同じ親の子」であり、「同好の士」にも、「同類の物」の意味でも用いる。「尼僧」や「修道士」の意味もある。

形容詞は，“сестра”の方にだけ，“двадцатилетняя”と“[не]замужняя”が残る。年齢と未婚かどうかに関心をもたれているようだが、名詞の方では，“увлечения”「関心事」，“занятия”「授業」，“образование”「教育」，“отметки”「成績」，“книги”「本」，“комната”「部屋」，“подруга”「ともだち」，“дети”「こども」，“дочь”「娘」が“сестра”とだけの関連語で出ている。勉強や仕事に励む姉（妹）の姿が浮かぶ。“дочь-сын”の場合と反対になっている。“брат”の方には“лицо”だけが独自の関連語として出ている。

しかし派生語の“сестринский”と“братский”には使われ方に大きな違いがある。後者は「兄弟の、兄弟のような」から発展して、「親密な、友好的な」という意味で広く使用される。“братское отношение（友好関係）, братский привет（連帯のあいさつ）”など。

невестка – зять

“невестка”は「息子の妻、実の・義理の兄弟の妻」，“зять”は「娘の夫、実の・義理の姉妹の夫」で、意味する範囲は同じである。しかし，“невестке в отместку（сделать что-либо）”「腹いせに～する」という言い回しがあり、婚家先での嫁の微妙な立場を表している。

息子の妻には，“сноха”という呼び名もある。この呼び名の使用範囲が問題で、

[Ушаков] (1940 年発行) と [СРЯ4] (1984 年発行) には “жена сына по отношению к его отцу, свекру.” 「舅に対する息子の妻」とあるが, [СРЯ17] (1962 年発行) には “жена сына.” 「息子の妻」とだけある。例文にも “К снохам Татьяна Власьевна относилась, как родным дочерям.” 「タチヤナ・ヴラシエヴナは, “сноха” たちに実の娘のように接した。」とあり, 姑からみても “сноха” というらしいことがわる。[Ожегов] も最新改訂版から, これまで “жена сына по отношению к его отцу.” としていたのを, “женщина по отношению к отцу и матери ее мужа, невестка.” 「夫の両親に対する女性, 嫁」と変えた。しかし, “снохачество, снохач” 「息子の嫁と通じること・通じた舅」という俗語があり, これとの関連で「夫の父親に対する嫁」の意味合いの方を強く感じている人も多いと思われる。

мачеха – отчим

「継母」「継父」のことであるが, “мачеха” の方にだけ「意地悪な人, 嫌なもの」の転意がある。

невеста – жених

どちらにも「婚約者」「花嫁・花婿」と「結婚適齢期の女・男」の意味がある。“невеста” は歴史的には「息子の妻」も意味したが, この意味は今は “невестка” に譲っている。

女性は長く “невеста” の状態を続けると, “засидеться в невестах” 「“невеста” のままいすわる」「вековая невеста」「いつも変わらぬ “невеста”」「Христова невеста」「キリストの “невеста”」とやゆされるが, 男性はそんなことはない。“Супружеского счастья он в своей жизни не испытал и потому до сих пор еще считается женихом, и даже выгодным женихом.” 「彼はまだ結婚の幸せというものを経験していないので, 今も <結婚適齢の男> それも <有利な結婚相手> と考えられている。」(Тург. Два помещ.) [СРЯ17]

вдова – вдовец

どちらも「つれあいに先立たれた女・男」のことであるが, 相手が生きていて別れて暮らしている場合には, “соломенная вдова” “соломенный вдовец” となる。ところがこの2つの熟語の説明に, 微妙な違いのある辞典がある。まず [СРЯ17] には, “Соло-

менная вдова – о не живущей или разлученной с мужем женщине.”「夫と別居中、または引き離された女性⁹⁾」。“Соломенный вдовец – о временно оставленном, а также о покинутом женой муже.”「一時的に一人にされた夫、および妻に見捨てられた夫」とある。どちらの熟語もややおどけた表現であるが、説明を読むかぎり男の方に哀れみが漂う。それは、女性の方には、自分から望んだ別居も入る表現になっているのにくらべ(о не живущей с мужем женщине)、男性の方は、自分の意志でなく一方的に置き去りにされたという受身の表現になっているためである。現実にはそういう意味であるなら、まことに厳密で正しい説明ということになるし、そうでないなら“вдова”より“вдовец”の方に、辞典執筆者の同情の気持ちが働いているということになる。

〔研究社〕の説明は次のようになっている。「Соломенный вдовец- 妻の不在中、一人暮らしを余儀なくされている夫、一時やもめ。Соломенная вдова- (夫が旅に出たりして) 空聞(くうけい)を守っている妻」。この2つの説明の間にあるニュアンスの違いは、上記の旧ソ連で出版された辞典からは感じられないから、「空聞(ひとり寝の寂しい寝室)を守る」という言い方には、日本人辞典執筆者の女性観が、はからずも出たと言えるであろう。

3 ま と め

ここで取り上げたペア語は、2つならべて使用する際、男性を意味する語がいつも先に置かれる(мальчики и девочки; юноши и девушки; мужчины и женщины; отец и мать など)¹⁰⁾。

女性側の語が性的ニュアンスを帯びて、意味が下落しやすい¹¹⁾。ややや罵言に使われやすい。“девочка”や“девка”, “женщина”のように, 「売春婦」「身持ちの悪い女」の意味をもつようになったり, “мать”のようにいくつもの汚い罵言に使われたりする。また既婚女性を表す“женщина”“жена”は, 悪い性格を表す形容詞とともに用いられることが多い。“мачеха”は語そのものが「悪い人・もの」の意味をもつようになった。しかし, “мать” “старуха” “бабушка” “сестра” などにつく形容詞に, 悪い性格を表すものが上記の“женщина” “жена” 2語にくらべ少ないのは, 男性の性的対象からはずれるからである

9) 女性の場合には, なんらかの理由で一時的に夫と別居しても“соломенная вдова”と呼ばれるのかどうかははっきりしない。

10) “Дамы и господа!”は例外。最近のロシアの子ども向けテレビ番組で, “Девочки и мальчики!”と呼びかけているのを何度か聞いたので, 変化が出てきているのかもしれない。

11) 英語についてもこの点の指摘がなされている。Muriel R. Schulz, The semantic derogation of woman. The Feminist Critique of Language. Edited by Deborah Cameron. Routledge, 1990 参照

う。それにしてもロシア語には「売春婦」「ふしだらな女」を意味する言葉が多いのに驚かされる。“проститутка” “публичная женщина” “ночная бабочка” “блядь” “курва” “шлюха”... 数え上げたらきりが無い。

男性側の語には、このような意味の低下は見られず、むしろ威厳を保ち続けているものが多い。“отец”が「創始者」，“муж”が「各界の名士」，“старик”が「経験豊かな人」の意味でも使われる。「先祖」や「子孫」の意味では、男性側の語が使用される（отцы и деды; сыновья; старики）。ただし“сын”は罵言にも使われる（Сукин сын! 「畜生！」など）。

他の多くの言語と同様、ロシア語にも、女性の一生で大事とされる節目は、性的成熟と、結婚であることが言葉に刻まれている（девочка-девушка-женщина）。男性の場合は、肉体的・精神的成熟である。女性は未婚の間は性格以上に容姿を問題とされ、“красивая”などの外見を表す形容詞がよくつく）、しかも結婚し遅れぬよう脅迫される（オールドミスを意味する言葉のなんと多いことか）。“девушка”の間は“хорошенькая” “молоденькая” “かわいらしい” “若い”とちやはやされるが、“женщина”になってしまうと、“тихая” “скромная” “трудолюбивая” “おとなしくつつましい働き者”であることを期待され、そうでないと“злая” “крикливая” “скандальная” “意地悪い” “口やかましい” “騒々しい”とうとまれる率が高くなる。

「女」を意味する俗語の“баба”で男を呼ぶと、最高の侮辱になる。“Если мужчина заплачет, так его бабой назовут, а эта кличка для мужчины хуже всего.” “もし泣き出した男を“баба”と呼んだら、この呼び名は男にとって最悪だ” [СРЯ20]。それは“Бабы сказки, сплетни.” “女の話はいいかげん” “Бабыя (женская) логика.” “女の論理—感情的・身勝手な論理” “У бабы волос долог, да ум короток.” “女の髪は長いが知恵は短い”などのことわざ・表現がいくつもあるように、女は男より一段低い存在とされてきたから、その「女よばわり」されることぐらい、男が屈辱を感じることはないであろう。

女性を意味する言葉には、男性の女性を見る目が強く反映されていることがわかる。長く続いた家父長制のもとで、女性がいかに男性に都合よく生きることが要求されてきたかが、よくわかる。しかし社会は変化しているし、女性の発言権も増しつつあるから、言葉も変わって行くであろう。

言葉の変化に辞書は常に遅れてついていくから、ここで取り上げた語の中には、もう意味が旧くなったり、新しい意味が加わったり、新しい使い方が生まれているものもあるかもしれない。新アカデミー辞典が早く全巻出版されるよう期待したい。